

コロナ禍も少し落ち着き、チャンス到来！ずっと気になっていた謎「大國魂神社に、なぜ六所宮という別称があるのか？」神社に聞いてみた。その後、各宮も取材した



<五ノ宮> 金鑽神社を訪ねて

五之宮・金鑽（かなさな）神社（埼玉県児玉郡神川町二の宮）に行ってきました。

寒さの緩んだ2月初めの晴の日に、八王子から八高線と路線バスで約3時間の小さな田舎旅でした。武蔵野台地をワンマン電車で揺られ、灰色の枯野と雑木林を抜けていく車窓は、古代の官人が歩いた武蔵野の風情を感じさせました。丹荘駅から路線バスで約10分、川沿いの里・新宿につき、ここから御室ヶ嶽（御嶽山）の中腹にある神社まで、坂道徒歩20分で大鳥居。石柱には、武蔵国二宮とありました。武蔵国では氷川神社に次ぐ古社です。創建は景行天皇41年（西暦111年）、大國魂神社と同年です。日本武尊の東征の折、身につけていた火打ち具を御室ヶ嶽に納めて、天照大神と素戔鳴尊を祀ったのが始まりだそうです。

御神体は、拝殿の裏にそびえ立つ御室ヶ嶽ですので、御神体



を祀る本殿がありません。拝殿にお参りしたのち、ご神体に土足で登るのにためらいましたが、ハイキングコースの表示があり、見晴らし台や鏡岩と呼ばれる天然記念物があるというので、頂上（343m）まで登りました。途中まで階段が整備されていたが、頂上付近は樹々の根がからみあう狭い急坂で、ロープを支えにやっとの思いでたどり着きました。見晴台の岩山から関八州をのぞむ展望はすばらしかったです。また、山道の両脇に並ぶ石塔や歌碑は、うっそうと茂る杉やヒノキと共に、ここが霊域であることを実感させてくれました。



山をご神体とする最も古い形式を残す金鑽神社が鎮座するこの地は、今は武蔵野台地の北西部の辺境ですが、古代は東山道で大和に連なる進歩的な地域であったのでしょうか。山裾の神流川では刀の原材料の砂鉄（金砂）がとれたので、神社の名前の由来にもなっているそうです。（奥野英城）